

イントウ・ザ・サン

2005(平成17)年10月14日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)



監督＝ミンク／製作総指揮＝スティーブン・セガール／出演＝スティーブン・セガール／マシュー・デイビス／大沢たかお／エディー・ジョージ／ウィリアム・アザートン／ジュリエット・マーキス／ケン・ロウ／豊原功補／寺尾聰／伊武雅刀／ベース・ウー／栗山千明／山口佳奈子(ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2005年アメリカ映画／94分)

……選挙活動中の東京都知事候補が、白昼堂々と射殺！ 現実に想定されるやばいケースだが、その真相解明にあたるのはなぜか東京生まれで東京のヤクザ事情にも詳しいヘンな外国人のスティーブン・セガール。新旧ヤクザ抗争の活用は余裕(?)だったが、恋の告白をした日本美人まで殺害されると、彼の我慢も限界に……。日本刀による殺陣や指切りげんまんの儀式(?)そして笑いを誘う関西弁の数々は、ハリウッドが勝手に日本を描くとこんな風になってしまうという悪しき典型……。これでは、「日本を舞台にしたハリウッド製超極太任侠アクション」として楽しむのは、ちょっとしんどいでは……？

日本びいきのセガールとミンク監督だが……？

『沈黙シリーズ』で有名なスティーブン・セガールは、過去10年にわたって日本に滞在した経験があり、「日本は僕にとって第二の、いや第一の故郷と言えるかもしれない」と言うほど大の日本びいき。そして、この映画が長編2作目となるミンク監督も、日本大好き人間のクエンティン・タランティーノ監督が主宰するバンド・アパートに籍を置いていることもあって、ニッポンを舞台にした映画を撮りたかったとのこと。

また、あの『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』(03年)で「ゴーゴータ張」役を演じて一躍注目を浴びた栗山千明をどうしても使いたかったとのことだが、さてその役柄は……？

ハリウッド映画が描くニッポンは？

今時、日本のイメージが「フジヤマと芸者」ということはないだろうが、ハリウッド映画が描くニッポンは、物干し竿に旗を立てプールに軍艦の模型を浮かべていた『パール・ハーバー』(01年)のシーンのように、ロクでもない映像になることが多い。そして、どうもこの映画にもその傾向が……？

拳銃や爆弾を使ったアクションはもちろん、空手やカンフー対決など何でもござれのスティーブン・セガールは、この映画では凄腕のCIAエージェントであるトラビス・ハンターに扮し、拳銃を使わずあえて日本刀を多用……。さらに、着物美人ナヤコ(山口佳奈子)との結婚を約束するシーンでは、日本風の「指切りげんまん」の儀式も披露……。

そのうえ、試写室内で再三の失笑をかっていたのが、セガールのヘタな日本語と時々そこに混じる関西弁……。宣伝チラシには、「関西弁炸裂！」と書いてあるが、これではまるで「お笑い」の世界……？

新旧ヤクザの姿もヘン……？

この映画で敵役の黒田に扮するのは、『世界の中心で、愛をさけぶ』(04年)で多くの女性を泣かせた大沢たかお(『シネマルーム4』122頁参照)。そして、目的のために手段を選ばない黒田があえて組むのは、凶暴な中国マフィアのチェン(ケン・ロウ)。さらに黒田の側近が、タケシ(大村波彦)と川村(本田大輔)の2人だが、トップの黒田にしても、タケシと川村にしても、カッコをつけて凄みを利かせているものの、あまり頭は良くなさそう……。また中国マフィアのチェンも「Are you crazy?」と問われると、真面目に(?)「I am crazy」と答えているとおり、根っから頭が悪く、単に凶暴なだけの男……？

これに対して、トラビスが「反黒田連合」として手を組もうとしたのは、旧勢力を代表するヤクザの小島(伊武雅刀)。しかし、彼も一体どんな仕事をして組を養っているのかよくわからず、旧態依然としたヤクザ色を出して、すごんでいるだけ……。ハリウッドの監督は、日本ヤクザについてこの程度の理解しかできていないのかと思うと、少し失望……？

都知事候補暗殺事件の捜査は……？

CIAのエージェントとしてタイで活躍していたトラビスが、東京に登場することになったのは、選挙戦の真っ只中にあった都知事候補が白昼公然とバイクに乗った2人組によって射殺されたため。こんな事件が平和な国ニッポンで起こったとすれば、日本中が大パニックになるうえ、世界に誇る日本の警察組織を中心として、徹底的にその全貌が解明されるはず。そして、この映画で観たような単純な犯行の場合、実行犯の人物像はもとよりその背後関係もすぐに突きとめられるはず……？ しかし、この映画にはそんな優秀な日本の捜査陣は全く登場せず、なぜかアメリカのCIAのトラビスが潜入してきたうえ、彼が協力を仰いだのは、黒田に利権を奪われている旧勢力のヤクザ。こんな映画がまかり通ったのでは、日本の治安責任者も真っ青……？

そのうえ、トラビスの相棒となるFBI捜査官のショーン（マシュー・デイビス）は、いくら若いからとはいえ、その行動はあまりにも幼稚すぎるもの。したがって、チョコチョコと動いた挙げ句、凶暴で凄腕のチェンによってすぐにジ・エンド……。これでは、FBIも真っ青……？

中国人美女に期待を……

ミンク監督は、本来は栗山千明を活躍させたかったのかもしれないが、その栗山千明に代わって『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1』（03年）の「ゴーゴータ張」のように日本刀を振り回すカッコいい役で活躍するのは、中国人美女のマイ・リン（ペース・ウー）。彼女は1978年の台湾生まれとのことだが、こんなB級映画（？）でも、こんな中国人美女が出演していれば何とか救われるもの。私としては、今後の彼女の活躍に期待を……。

最後の決戦も迫力不足！

鶴田浩二や高倉健主演のヤクザ映画はもちろん、藤純子のそれでも、最大のハイライトが最後の殴り込みシーンにあるのは当然。大勢の敵が待ち構えていることがわかっているにもかかわらず、唯一人敢然とそこに乗り込み、数々の刀キズを受けながら、

最後は悪の本丸をやっつけるという筋書きはどの映画でも共通のもの……。しかし、映画の出来の良し悪しは、その美学がどこまで表現されているかによることになる。ところが、この映画では……？

大沢たかお演じる黒田やその側近のタケシや川村が、体格的にも武術能力においても、圧倒的にトラビスに劣っていることは明らかなはず。ところが、そんなトラビスに対して、黒田たちが何の備えもせず、酒ばかり飲んでいる姿を見ると、「お前らバカか！」と思わず叫びそうに……。そのうえ、血がベツトリと付いた日本刀を持って部屋に入ってきたトラビスに対して、黒田がすぐに拳銃を発射しないのはなぜ……。黒田がよほどの剣道の達人であるという前提であればまだしも、そんな挿話は何も紹介されないまま、1人日本刀でトラビスに立ち向かっていった挙げ句、少しは対等に(?)斬りあったものの、最後はごく自然にやられてしまう姿を見ると、「お前はアホか！」と思ってしまうのは当然。中国マフィアと組んでまで、旧勢力のヤクザを駆逐しようとしていたはずの黒田の頭の出来も、所詮この程度かと考えると情けない限り……。これでは、最大のハイライトシーンも迫力不足……？

不動明王もヘンなキャラ……？

黒田亡き後、関東ヤクザの総元締め立場に就任する伊武雅刀扮する小島は、それなりの存在感のある役柄だが、トラビスに協力を約束する財界の大物である寺尾聰演ずる松田は、都知事候補の娘役となる栗山千明と同様、ほんのチョイ役……。

これに対して、彫師の不動明王を演ずる豊原功補は、トラビスに協力して情報を提供する役割だが、最後には、この不動明王もトラビスと一緒に黒田宅への殴り込みに参加……。さて、その動機は、そしてその活躍ぶりは……。また、トラビスから残るように言われた中国人美女マイ・リンの活躍ぶりは……？

インターナショナル映画は難しい……？

この映画の狙いは決して悪くないと思うのだが、再三述べるようにいかんせん、ニッポンや東京そして日本人やヤクザについての学習が不十分……。この映画

は、セガールを主演させたハリウッドがあえて東京を舞台に描いたものだが、中国、香港、台湾、韓国による共同製作映画が増えている昨今、セガールが関西弁をしゃべるのと同じように、『オペレッタ狸御殿』(04年)では章子怡チャン・ツイイーが日本語をしゃべり、逆に今年12月公開の『SAYURI』では、渡辺謙や役所広司が英語をしゃべっている……。この『SAYURI』には、私の大好きな中国美人女優である章子怡チャン・ツイイー、鞆俐ゴン・リー、楊紫瓊ミシェル・ヨーの3人が揃い踏みするが、彼女たちはみんな日本語のセリフを……。

これがアジアの国際化であり、インターナショナル映画の本格的到来を告げているわけだが、果たしてその出来は……? スティーブン・スピルバーグ監督が、アジアを代表する俳優を結集して製作した映画だけに、この『SAYURI』ではこの『イントゥ・ザ・サン』のような違和感がないことを願っているが……。

2005(平成17)年10月15日記

ミニコラム

国際派スターのさらなる輩出を!

ひと昔前の国際派スターは三船敏郎、石原裕次郎だったが、近時のそれは、『ラスト・サムライ』の渡辺謙。そして、それに続くのが、『PROMISE』の真田広之や『SAYURI』の役所広司など。

今年の大リーグではイチローの出走が不調だが、松井秀喜・井口資仁らはもちろん、日本人初の捕手大リーガー城島健司も大活躍。

映画産業を国策と位置づけて、韓流スターや監督を育成してきた韓国に対抗するべく、近時日本でも、東京芸大大学院映像研究科映画専攻の新設や北

野武監督の教授就任などの動きが顕著。しかし、「島国ニッポン」から脱却し、真の国際派スターを育てるために不可欠なのが語学。日本人大リーガーたちの活躍は野球の実力だけではなく、語学力・対話力に負うところが大きい。そんな視点から、渡辺・真田・役所に続いて20代の若手も次々と国際派スターを目指してもらいたい。また中国一の美女(?)章子怡チャン・ツイイーが今や国際派女優No.1に成長したことに刺激を受けて、小雪に続く若手女優陣も発奮してもらいたいもの……。

2006(平成18)年4月19日記